

ローベルト・ムージル文学における心理学の意義

— 1920年代のイェンシュ受容を中心に —

津 田 拓 人

1. 問題設定

作家ローベルト・ムージル（1880-1942）には、第一次世界大戦後の社会の混乱期の中でなんとか家計を安定させるために、「ブラーガー・プレッセ」紙に書評や劇評を寄稿していた時期がある¹⁾。そこで発表された書評は、ムージルが自分の気に入ったドイツ語の文献をプラハの知識層に紹介するというものだったが、現在から見れば、1920年初頭のムージルの読書傾向と知的興味の所在を告げているという意味で、一見の価値がある資料となっている。その内の一つ、1923年6月23日に寄稿された、「文化誌 — 資質・遺伝研究から」という題目の書評をここで取り上げたい。書評の対象は、E・R・イェンシュという実験心理学者が、1923年に権威ある「心理学雑誌」に発表した研究論文である。「直観像」という視覚上の知覚現象について論じたこの論文を、ムージルは「興味深い研究」[GW II. 1701.]と受け取ったらしい。

実験心理学の専門的研究を扱った、およそ文学とは関わりのなさそうなこのテキストになぜ注目する必要があるのだろうか。この書評は、紙面の制約もあって全集版でわずか二頁分の分量しかなく、イェンシュの論文の要約に終始していることもあって、論文のどの点がムージルの興味を引いたのかは一読したかぎりではわからないが、この頃のムージルが位置していた知的コンテキストの中にこれを置いてみるならば、1920年代のムージル文学に有形無形に刻み込まれている当時の（実験）心理学、民族学、精神病理学の連関が浮き上がってくることがわかるだろう。ムージルの美学について包括的研究を行ったM-L・ロートは、このテキストの問題圏が、この時期のムージルの重要な発想源となった、L・レヴィ＝ブリュール、E・M・ホルステンボル、E・クレッチュマーらの著作に接続するものとして評価している²⁾。これら三人のうち特にレヴィ＝ブリュール受容に注目し、ムージル文学における同時代の知的、社会的連関を明らかにしようとする一連の研究³⁾の中でも、この書評が問題にされていることが目に付く。本論文では、これらの先行研究を参照しつつ、イェンシュ受容の問題を軸にして、1920年代前半から中盤におけるムージル文学と心理学の関係について考察してみたい。

具体的な論の流れとしては、第二節でムージルと心理学とのつながりを伝記的な観点も含めて確認し、心理学がムージルの創作に持っていた意義を検討する。第三節では、イェンシュが1923年に発表した実験心理学研究の内容をムージルの書評と併せて読解し、当時の心理学が民族学にどのような点で接近していたかについて論じる。第四節では、イェンシュの直観像研究と

クレッチュマーの精神病理学研究の間に見られるテーマ上の共通性に注目する。その上で、クレッチュマーの著作をムージルの作品と比較検討する。

2. ムージルと心理学

ムージルは、1921年6月1日付の手紙の一節で、友人の実験心理学者J・v・アレシユに次のように書いている。

近日中にマールブルクでの学会に関する学術報告は出版されるだろうか？あるいは僕が主に関心を寄せているもの、つまりイェンシュの研究は本か雑誌で読むことができるだろうか？時事問題についていくつか記事を書いたのだが、僕の読んだ新聞報道のせいですこし不安になった。イェンシュの結論が僕の予断と合わないからだ。「心理学雑誌」が報告を出すのだろうか？僕は十年來の尊い若き日の思い出をもはや手の内にしていない。ああ魂の事柄よ、ああ人生よ！[B. 233.]

ここで言われている「学会」とは、マールブルクで1921年4月20日から23日まで開催された第七回実験心理学学会のことである。E・R・イェンシュはそこで、後述の「直観像」という知覚現象についての研究報告を行っており⁴⁾、ムージルはそれについての新聞報道を目にしたらしい。ムージルの「予断」とイェンシュの「結論」の相違については判然としない。しかし少なくともこの書簡からは、「十年來のこの尊い青春の思い出」、つまり実験心理学にたずさわった自分の大学生時代を回顧する声が聞こえてくる。あるいはひょっとすると、自分の心理学の専門知識がもはや時代遅れなのではないかと「不安」を感じている、いまや四十歳をむかえた作家の嘆きの声さえも聞き取れるかもしれない。

後の論点を明確にするために、ここでは「魂の事柄」、すなわち心理学にムージルがどのように向き合っていたのかを伝記的情報を踏まえて簡単に振り返っておこう。ムージルは、1905年から1908年までベルリン大学の実験心理学研究所に在籍し、哲学と心理学を学んだ。指導教授はC・シュトゥンプである。アメリカの心理学研究者がドイツの主要な研究所（とくにW・ヴァントを擁するライプツィヒ）に留学経験があるというだけで本国の研究ポストを得られたという逸話もあるほど⁵⁾、ドイツが実験心理学の分野において先進的だった二〇世紀初頭のこの時期、シュトゥンプの下には、ゲシュタルト心理学のベルリン学派をのちに牽引することになる俊英たち（M・ヴェルトハイマー、W・ケーラー、K・コフカ、E・M・v・ホルステンボル）が集っていた。前述の手紙の相手であるアレシユもムージルの学友である。実験心理学者の卵としてのムージルは、1905年に視覚研究用の実験器具「色彩回転機」を考案し、これが好評を博すなど、この分野で一定の貢献を果たしている。ムージルがベルリンで影響を受けたのはとりわけC・v・エーレンフェルスのゲシュタルト理論だった。これはムージルが学位請求論文のテーマに選

んだE・マッハの哲学から着想を得ていた。日記の記述や伝記を見るかぎり、ムージルにとっては、地道な実験観察にもとづく実証的研究よりも、マッハ哲学に関する彼の学位請求論文に見られるような思弁的な心理学のほうが性にあったようで、実験そのものにはあまり気乗りがしなかったらしい⁶⁾。

学位取得後の1909年にはグラーツ大学のA・マイノングから助手にとの勧誘があった。これは、すでに処女作『寄宿生テルレスの惑い』(1906)で一定の成功を得ていたムージルに対し、学問か文学かの二択を突き付けるものだった。ムージルはこの勧誘を謝絶し職業作家になることを決心したが、そこに揺らぎがなかったわけではない。晩年のムージルの日記には、自分が卒業後も「心理学と接触を保とうと」したものの、文学への関心が先行したために専門研究からは遠ざかったこと、学者のキャリアを選んではいけば「心理学と哲学における転換を精神的に共体験」する機会を持たたであろうことを述べた箇所があり、グラーツ大学での退屈な助手勤務を経たのちに作家活動に入る「自然な成り行き」もあったのではないかと作家は自問自答している。[T.I. 918f.] 1911年10月1日の日記には、ホルステンボルとヴェルトハイマーと話す機会があった折に「心理学にいくらか郷愁」[T.I. 240]を覚えたとも書かれてある。このころ、ヴェルトハイマーは、ベルリンのゲシュタルト心理学派の出発点⁷⁾となる論文「運動視に関する実験的研究」(実験は1910年、論文発表は1912年)を準備していたので、「心理学と哲学における転換」は実際ムージルのすぐそばを通り過ぎていたことになる。

ムージルは作家として、このころ心理学にどうかかわったのだろうか。処女作『テルレス』にはすでに、思考と感情、形象と概念、認識と想起、これらが一体となったときに生じる世界の変化の瞬間をどう記述するかという、ムージルの作家としての主要テーマがあらわれているが、この小説は、ムージルが本格的に実験心理学研究にたずさわる以前の1902年から1905年の間に執筆されたために、心理学と文学の関係性についての問題意識ははまだ希薄である⁸⁾。

学位取得後の1910年代の彼の執筆活動のなかでは、駆け出しの作家としての自意識のせいだろうか、概して心理学に対する冷淡さが見られる。1911年に発表された意欲作『合一』では、ムージルは、マッハ哲学(およびゲシュタルト理論)に濃く影響された叙述方法を採用する一方で、登場人物の心理を描くにあたっては、個々の心理学の学説に距離をとっている。彼は、この時期のエッセイ「芸術における猥雑なものとの病的なもの」(1911)で、学問的思考と芸術的思考の性質の違いを述べることで、芸術家としての自己の立場を説明しようと努めている。

同一の事例において医師は普遍妥当性のある因果関係に関与し、芸術家は個別の感情の連関に関与する。学者は現実的なものを包括的な図式にまとめることにこだわり、芸術家は内面のまだ知られていない可能なものの記録を充実させることに関心を寄せる。[GW II. 980f.]

この「内面のまだ知られていない可能なもの」を芸術の対象にするとムージルが言うとき、彼の念頭にあるのは次のようなことである。

そして決定的なのは要素の全体であること、つまり今日、病的あるいは健康的と分類されている諸要素の、数値的關係、側面、重量、緊張、価値關係などの、実に複雑な關係が問題なのであって、これらの要素はけっして一義的に病的あるいは健康的なのではなく、特定の魂の特定の場における諸要素の積算結果いかんで、病ないし健康の意味をもちうる、ということである。[GW I. 981.]

ここでは、人間の「魂」の在り方を感情と思考の多面的なゲシュタルト的複合体として捉え、これを文学の精妙な言葉でとらえなおすことこそが芸術家の課題である、というムージルの基本的立場が示されている。硬直的な一般法則性に拘泥しがちな学問的思考を創作から退けるこのような姿勢は、1910年代の彼の活動にたびたびあらわれる。1918年の「詩人の認識のスケッチ」では、彼のこの考えが、二つの対立概念——「理性的領域」(ratioïdes Gebiet)と「非-理性的領域」(nicht-ratioïdes Gebiet)——のかたちを取る。理性的領域とは、「学問的な体系化が可能なもの、法則と規則に収束可能なもの」[GW II. 1027.]、つまり事実や固定的なものから片時も離れない思考形態を特徴とする。「非-理性的領域」とはその逆に、事実や現実を絶対視せず、「常に新しい解決策、相互の關係、情勢、変数を見つけること」によって、「内的な人間」[GW II. 1029.]の可能性を追求するような思考形態とされる。心理学はここでは「理性的領域」に入れられる。

心理学は理性的領域に属し、心理学的事実の多様性もまた、経験科学としての心理学の存在可能性が教えるように、けっして無限ではない。予測不可能なほどに多様なのは、ただ魂のモチーフのみであり、それらと心理学は何一つかわりがない。[GW II. 1029.]

1910年代のムージルの創作理論については深く踏み込まないにしても、ここから読み取れるのは、物を考える一人の人間として、作品創造に何者にも邪魔されない思想上の自由を担保したいと望む作家の姿である。その点を強調するあまり心理学（そして学問）に対して距離を置きすぎているという印象を受けるが、ムージルの「理性的領域」における思考の硬直性を文学に導入することを拒否したのであって、学問および理性そのものを否定したわけではない。

ところで1920年代に入ると、心理学への評価に変化が認められる。O・シュペングレーを批判するエッセイ「精神と経験」(1921)を見てみよう。ムージルのここで、「学問的な心理学」、「因果論的な心理学」を文学に応用することにいまだ留保はつけながらも、非合理主義に傾倒するシュペングレーが、当時流行の「体験」や「直観」といった概念を粗雑な言葉で表現して済ませているのに反対し、それらの概念で表現されている心的状態を、理性の言葉、学問的な厳密さを持つ言葉で捉えなおそうとした。そのためにムージルの「文芸的心理学」(dichterische Psychologie) [GW I. 1052.]なるものを論じている。それは、人間の様ならざる内面世界を行為、情動、思念の面から解きほぐして理解できるものに変える「人間知」と「動機付け」[GW

II. 1052.] を目指す心理学であり、あるいは「対象となる事実が「体験」の中に成立しているような領域の方法論」[GW II. 1050.] としての心理学であるとムージルは言う。やや難解な言い方ではあるが、要するに彼はここで、「非-理性的領域」に属する事柄を記述するための方法論を、心理学にも見出したということではないだろうか。エッセイ「寄る辺なきヨーロッパ——あるいはあてどなき旅」(1922) に目を転じれば、ケーラーの「静止および定常状態における物理的ゲシュタルト」(1920) について、その中に「経験的学問の基盤として、古代からの形而上学的難問の数々を解決する道筋がすでに示唆されている」[GW II. 1085.] と高い評価を下している。後述するように、人間の視覚的知覚構造の法則を問題にするイェンシュの実験心理学にムージルが感銘を受けたのも、この時期に当たる。

心理学に対するこのような評価の転換がもっとも顕著にあらわれたのが、1925年のエッセイ「新しい美学へのきざし」においてのことだった(以下「美学エッセイ」と表記)。ムージルがこのエッセイで、重要概念「別の状態」(anderer Zustand) について、初めて人目に触れるかたちで語ったことはよく知られている。これは、『特性のない男』第二巻での、主人公とその妹の神秘的な恋愛の根幹をなすキーワードである。1920年代前半期には、作家自身、この概念によってあらわされる心理状態を言語化するのに苦闘し、その助けを得るために様々な分野の文献に知的興味を広げ、文献中に自分が探すものの片鱗を見つけては丹念にメモを取っていた。それまでは (aZ) という記号とともに、創作メモや草案、日記の中に断片的に記されていた「別の状態」が、このテキストで唯一ある程度まとまった分量で言語化されているため、「美学エッセイ」は「別の状態」についての作家の中間報告とでもいえるものとなっている。

これは元々、B・バラージュの映画評論『可視的人間』(1924) の書評として発表された。無声映画のスクリーンの上で、人間と事物がともに沈黙し、視覚的な孤立状態に置かれるとき、両者は差異を失い、ひとしく見慣れない生命感と意味を獲得し、象徴的な相貌を帯びるという点に、ムージルはこの映画論の核心を見た。映画の芸術体験を通じた世界認識の変容の可能性をこのように提示したバラージュに触発されるかたちで、ムージルは、ノヴァーリスが自らの霊妙な体験に見出したという「あの意識の変化」[GW II. 1143.] について触れ、その精神状態の考察へと入っていく。これこそが「別の状態」である。「別の状態」は、「通常の状態」(normaler Zustand) とともに、人間の精神状態を二分するものとして捉えられている。「通常の状態」は、前述の「理性的領域」に対応する概念である。この精神性が、計算、測定、定量化などの因果的・実証的思考形態を本質とし、人間が地上の支配者となることを可能にしてきたものであるのに対し、恋愛体験や宗教的エクスタゼのなかに見られる「別の状態」は、「尺度」も「正確さ」もなく、「われわれの存在が事物や他の人々との存在に、不可思議に膨張したり潮が引くように小さくなりながら流れ込む」、「善の、遁世の、瞑想の、無我の、神への接近の」[GW II. 1144.] 精神の境地とされる。1918年の「非-理性的領域」よりも神秘主義⁹⁾の色彩の濃い「別の状態」に関して注目したいのは、ムージルが映画を含めた芸術の「体験」に「別の状態」との共通点を認めたことである。「これまで神秘主義の領分だった体験様式が、ノーマルな、通常は

蔽い隠されているだけの体験様式であること」を、心理学を通して明らかにできるところで言明したのだ。その「心理学的説明」[GW II. 1154.]の論拠は、後で見ると、クレッチマーの精神病理学研究書『医学的心理学』から多く材を得ている。加えて、「感情心理学に役立つ貴重な着想に満ちた」[GW II. 1154.]この本と同じ文脈で言及されているのが、レヴィ＝ブリュールの著作『未開民族の思考』であり、「未開民族に見られる事物に対する特殊な態度の特徴」[GW II. 1141.]を近代人の芸術体験に通底するものと評価されている。

ムージルの心理学とのかかわりを振り返る中で見えてきたのは、1910年代には「理性的領域」に属するものと考えられていた心理学が、1925年には「非-理性的領域」の思考を解明する鍵として捉えなおされていく過程であり、その評価の変遷の裏には「別の状態」をめぐる表現上の模索があったということである。ムージルがイェンシュの実験心理学研究に興味を抱いていた1921年から1923年の期間は、この過程の中間期にあたる。この時期のイェンシュ受容が、1925年の「美学エッセイ」の中にどのように反映しているかについて第四節で論じるために、その準備として、次の節ではイェンシュの研究と、ムージルの書評テキストを検討しておきたい。

3. イェンシュの直観像研究とムージルの書評

「直観像」(Eidetik)とは、過去に見たことのある事物が明瞭に、かつあたかも目の前に現前するかのように見えるという知覚現象のことである。こうした特殊な知覚の存在は、すでに十九世紀のJ・ミュラーやG・フェヒナー等の心理学者が確認していたが、1907年、この現象にウィーンの医師V・ウルバンチッチが「主観的視覚的直観像」(subjectives optisches Anschauungsbild)と命名して以来、心理学の考察対象として知られるようになった(「直観像」という訳語はここに由来する)。この現象の研究を1930年代までの心理学界の主要テーマの一つにまで発展させたのが、マールブルク大学のE・R・イェンシュ(1883-1940)である。(Eidetik)(ギリシア語の εἶδος = 「見られるもの」)という造語をあらたにこの現象にあてた彼は、多くの共同研究者との組織的研究を主導することで、マールブルク大学の実験心理学研究所を直観像研究の中心地にした。イェンシュが直観像の研究に用いた実験方法で、現在「イーゼルテスト」と呼ばれているものがある。被験者を無地のイーゼルに対峙させ、その上に絵画を置き一定時間見せて、これを取り去った後で、被験者が目の前あるいはイーゼルの上に写像を見ることができかどうか、見えた場合その写像にどのような特徴があるのかを試す実験である。通常の知覚の持ち主でもこうした場合に残像が見えるが、残像の持続時間がわずかなのに対し、「直観像素質者」(Eidetiker)は長い時間にわたって絵画の写像を鮮明かつ細部まで「観る」ことができる。直観像の出現には被験者の主観による差異があり、直観像の持続時間、任意に直観像を見たり消したりできるか、直観像が静止して見えるか動いて見えるかといった違いがある。こうした視覚的な直観像のほかに、聴覚や触覚の領域にも直観像現象があるとされる¹⁰⁾。

ムージルが書評の対象に選んだのは、イェンシュの論文「青少年期における知覚界とその構造

について」の第六章と第七章である（以下では「直観像論文」と表記）。その第六章では、直観像素質者の意識の生理的構造について述べられている。イェンシュは、直観像素質者が学齢期の子供に多く見られること（ギムナジウム第二、第三学年に最も顕著）、年齢が上がるにつれて彼らの「直観像的素質」(eidetische Anlage) が希薄になることに注目し、直観像を、「知覚」(Wahrnehmung) と「表象」(Vorstellung) が未分化なままの未熟な発達段階に特有のものとした¹¹⁾。すなわち、生理的な意味で見えるもの（知覚）と、イメージとして主観的に見えるもの（表象）を一体として体感する直観像の段階が発達段階においてははじめに存在し、成長するにつれてこの二つが機能的に分化していくという次第である¹²⁾。直観像素質者のこの原初的な精神機能を、イェンシュは「直観像的発達層」(eidetische Entwicklungsschicht) と呼び、非直観像素質者の知覚構造の下部に位置付けた¹³⁾。こうした理論の根底にあるのは、当時とりわけドイツで流布していたヘッケル流の「系統発生は個体発生を繰り返す」というテーゼであり、これにより「子供→大人」と「直観像的素質→通常知覚」との平行図式が成立している。

「直観像論文」の第七章では、直観像素質者の知覚に類似するものとして「未開民族」(Naturvölker) の知覚が挙げられ、フランスのL・レヴィ＝ブリュール(1857-1939)の著作『未開民族の思考』¹⁴⁾で報告されている事例をもとに、この二つの思考が比較されている¹⁵⁾。第六章と同じく、イェンシュはこの章の冒頭で、自らの研究が生理学的には進化論的前提に基づいていることを強調し、未開人と直観像素質者(≒子供)を並べて、両者を比較する必要を述べている¹⁶⁾。「若者の「直観像的素質」を「未開民族の典型的状態として証明」しようとするイェンシュの研究が、「よく知られた種族発達と個人発達の平行関係」を利用していることをムージルも書評の中で指摘し、以下の例を挙げている。

この論文で紹介されている多くの例の中から、特に未開人の膨大な記憶力について触れさせていただきたい。彼らは、多くの場合すでに忘れられた言語による歌の歌詞を暗記することができる。その歌詞は最後まで歌うには五夜以上かかるほどの長さがあるというにもかかわらずである。これと同様の能力を持つ人々が、我々ヨーロッパの文化の中にもいる。直観像素質者ならば、つまり、生来の資質をもつがゆえに、自然に目の前に浮かぶ直観像から歌詞の映像を読み取ることができる人々ならば、通常の方法で歌詞を記憶に刻み込む必要がないのである。[GW II. 1701.]

レヴィ＝ブリュールの著作に豊富に提示されている民族学的資料がこのように心理学研究に転用されたことは本論にとり重要な問題となる。なぜなら、直観像素質者と未開民族のこのような比較は、植民地競争絶頂期の世紀転換期において、民族学、生理学、心理学、医学、社会学、宗教学、神話学を含む多彩なヨーロッパの学問領域が混交する知的パラダイム、「未開と文明」なしに成立しないからである¹⁷⁾。S・フロイトが『トーテムとタブー』(1913)で、イギリス人類学派のJ・G・フレイザーやE・B・タイラーらの著作に依拠し、そこに描かれた未開民族の思考を、

幼児の初期リビドー形態、さらに現代に生きる神経症患者の思考と比較し、それら三者を人類が宗教と科学にいたる以前のアニミズム的段階の心性として規定したことはよく知られている¹⁸⁾。フロイトが依拠したのがイギリス人類学派のアニミズム論だったのは、H・スペンサーの社会進化論に親和的な解釈をそこに見出すことができたからである。例えばタイラーのアニミズム説には、すべての民族が同一の心的構造を持ち（「個人心理学」）、同一の文化の発展経路をたどるとする進化論的色調がある。加えて、現代の未開民族の習俗、文化は、文明社会に残存する迷信や習俗と質的な連続性があるという「残存説」がとられている¹⁹⁾。これにしたがえば、「出来事全般を個人的な、いたるところにいる靈魂の意志の作用」と思い込む「原始人」(Wilde)のアニミズム的思考は、出来事の原因と結果の因果関係を理解する西歐的論理思考の前段階、すなわち「子供めいた哲学」²⁰⁾ということになり、フロイトの論にも合致する。

こうしたイギリス人類学派の個人心理学的所見に対して社会学的見地からの批判を試みたのが、ほかならぬフランスのレヴィ＝ブリュールの『未開民族の思考』（フランス語初版1910年、ドイツ語訳1921年）である。社会学者E・デュルケームの弟子であるレヴィ＝ブリュールは、社会的事実がそれ自身の固有の法則を持つことを強調し、社会構成員の心理活動の方向性を規定するような思考の社会学的カテゴリーとして「集団表象」(kollektive Vorstellung)なる概念を用いて、未開民族の思考を、西歐人の科学的・論理的思考とは質的に異なるもの、単なる劣等形態ではないものとして解釈しようとした。そのためのキーワードが「前論理」(Prälogik)、「融即」(Partizipation)である。レヴィ＝ブリュールによれば、「合理主義哲学と実証的科学が発展した地中海文化から生まれた我々の社会の心性」²¹⁾が、論理的矛盾を避けようとするのとは対照的に、未開人は論理一貫性に頓着せず、主体と客体の非同一次性というヨーロッパ哲学の大原則を時としてあっさり飛び越える。

未開思考の集団表象において、諸々の対象、存在、現象は、われわれには理解できない仕方でそれ自体であると同時にそれ自体とは別の物でもありうる²²⁾。

レヴィ＝ブリュールはこのような思考を「融即」と呼び、その例として北部ブラジルに住むトルマイ族が自らを水棲生物とみなし、隣の部族のボロロ族が自分たちを金剛インコとみなしている、というv・d・シュタイネンの報告を引用している。「融即」の特徴は主体と客体の融合であり、個人は集団が共有する、様々な表象の間の慣習的結合を受け入れることによって、こうした同一化を経験上あたりまえのものとして認識する。そして未開人の「前論理」性とは、西歐的な論理性に関心を払わないという意味で用いられているのにすぎない。「前論理」は、集団表象に基づく別な論理によって思考が方向づけられているという点で、反論理的でもなければ無論理的でもない、独自の思考様式と考えられている²³⁾。

未開民族の思考を社会および文化の所産として把握するというレヴィ＝ブリュールの集団表象説が、イギリス人類学派の個人心理学批判として提出されたことは見た通りだが、視点を変えて、

フランス心理学で活発だった精神病理学的アプローチとの関係性に目を向けるとき、事情はもうすこし複雑になるようだ。レヴィ＝ブリュールは、『未開民族の思考』の冒頭で、フランスの心理学者T・リボの『感情の論理』（1897）とH・マイアーの『感情的思考の心理学』（1908）を挙げ、それらの著作から心理機制における感情や運動要素の複雑な諸連関に気づかされたと評価しながらも、特にリボの生理学的、病理学的観点からははっきりと距離をとっている²⁴。その理由は集団性の心理現象が問題とされていないからというものだが、心理学史の流れを俯瞰するならば、これは広い意味での進化論の問題としても理解できるかもしれない。なぜなら『変態心理学』（1885）に代表されるリボの精神病理研究が、スペンサーの進化論から着想を得て心的諸機能を複雑な「層」と捉えた神経学者J・H・ジャクソンの観点を引き継ぎ、精神病による諸機能の「解体」からこの心の層の構造の解明を進め、次いでその影響を受けて力動的精神医学を発展させたP・ジャンネが神経症患者の「トラウマ」を理論化したとき²⁵、フロイトの深層心理学（精神分析）の成立まであと二、三歩のところまで来ているのだから。『トーテムとタブー』に代表されるような、二十世紀前半の心理学（精神医学）と民族学（社会人類学）の合流の道は一つではないのである。

多様な経路で世紀転換期を席卷した進化論的テーゼに多くを負っているという点では、イェンシュの研究も同様である。直観像素質者の認識を実験心理学的見地から研究するイェンシュが、『未開民族の思考』に対していかなる態度を取ったのかは、「直観像論文」第七章の副題中の語句「レヴィ＝ブリュールの未開民族の心理学」（傍点筆者）に端的にあらわれている。すなわち、イェンシュは、『未開民族の思考』の社会的に解釈された未開人の思考を心理学の対象とすることで、レヴィ＝ブリュールが前提としていた英仏間の議論の枠組みを解体したのである。それに代わって、「後期のW・ヴェント」および「F・クルーガー」によって導入されたライプツィヒ系の民族心理学（「より民俗学的・社会的な志向を持つ心理学」）と、実験心理学（「とくに青少年期の心理学」）²⁶ という、ドイツの心理学のコンテクストの中に、『未開民族の思考』を置き直している²⁷。ムージルは両者の違いを、「精神的な共同生活」の条件を重視する「社会的考察方法の支持者」レヴィ＝ブリュールと、生理学的な意味での直観像的素質に着目するイェンシュの対立として把握している。[GW II. 1702.]

ここでムージルの書評に立ち戻ってイェンシュの論文の要点を整理し、次の二点を確認しておこう。

(1) 自我と非・自我、主観的なものと客観的なものとの間の非因果論的同一性について。アララ族が自分たちを金剛インコだと自己理解するという例にあらわれているような、自己と世界、イメージと対象の不可思議な同一視は、一般の西洋人には理解しがたい。だが「自我と非・自我の間の区別がさほど厳格になされていない」[GW II. 1702.] 直観像素質者の認識に近いものがある。なぜなら彼らは視覚的直観像と実際の知覚の間で世界を認識しているため、しばしば主観的なイメージを客観的なものと誤認するからである。

(2) とはいえ自己自身をトーテム動物と同一のものと感じるアララ族の場合には、視覚的認知

能力はさほど問題にならず、むしろ人間と事物との「内的」かつ「非・視覚的」な「直接的」一体感が主要な役割を果たしている。この「内的な直観像」こそが、レヴィ＝ブリュールのいう「融即」であり、対して「外的」「視覚的」直観像は、直観像的素質を持った人間——子供以外にも未開民族ではシャーマン、呪医、文明社会では人智学や神智学といった「ヨーロッパの神秘主義」の体験者——に見られる。[GW II. 1702.] 内的直観像はおそらく、外的直観像と比較すると、意識の内部における古い部分に根拠を持っている²⁸⁾。

これまでの議論から、この二点においてもイェンシュが『未開民族の思考』をなかば牽強付会に心理学に引き付けて解釈していることがわかる。では、ムージルはこの「直観像論文」をいかなる点を評価し、わざわざ書評する労を取ったのだろうか。これは紙面の制約上、「直観像論文」の要約・紹介に終始している書評テキストからは直接読み取ることができないため、イェンシュの名が言及されている数少ない資料に目を向けてみよう。1921年からムージルは彼の研究を「心理学雑誌」等を通じて追っていたようで、概して高い評価をこれに与えていた。1921年から1923年頃と推定される日記 (Heft 21) では、直観像が、精神分析と並んで「世界を映す別の方法」を示すものとして取り上げられているだけでなく、「ケーラー、アレシュらとともに新しい世界像のきざし」を論じる特別な章の中で扱われる可能性までもが示唆されている²⁹⁾。[T I. 668.] しかし不可解なことにこの章もまた書かれることはなく、同じ Heft 21 で構想されていたエッセイ「兆候としてのドイツ人」のなかには直観像に関する考察も見られない。ここで取り上げた書評以外では、直観像についてのムージルの所見はきわめて限定的である。

そのため、イェンシュ受容がいかにしてなされたのかという問題を検討するには、別の文献を読み解き、そのイェンシュの影をそこに探す必要がある。そのため次節では、ここで得られた論点が1925年の「新しい美学」エッセイにどのように接続しているのかを、主にクレッチュマーの精神病理学の著作に依拠しながら検討する。

4. 「美学エッセイ」におけるイェンシュ受容 — クレッチュマーの『医学的心理学』の視点から

前節で検討した書評は、ムージルがレヴィ＝ブリュールの『未開民族の思考』について初めて公の場で言及したという事情があるため、このテキストを1925年の「美学エッセイ」の前段階として捉える先行研究においては³⁰⁾、イェンシュとレヴィ＝ブリュールの比較が前面に押し出されている。しかし、ムージルとイェンシュ、そしてレヴィ＝ブリュールをつなぐ別の経路については文献上のつながりが十分に示されてこなかった。それこそが精神科医エルンスト・クレッチュマー (1888-1964) の『医学的心理学』である。彼の数多い業績の一つであるこの著作は、自然科学と生理学分野の諸研究を精神医療の実践の観点から総合的にまとめた教科書風の著作で、ドイツでは1922年に初版が発表されてから繰り返し改訂され、時々の最新研究の成果を反映しながら、第二次世界大戦後も版を重ねている。本論にとって興味深いのは、クレッチュマーがその改訂第三版 (1926) で、イェンシュの研究——ムージルが興味を抱いた、1921年のマールブ

ルク学会の発表内容についての報告と、1923年の「直観像論文」第六章と第七章——を引用して、直観像研究を精神病患者の病状分析に利用していることである³¹⁾。ムージルは1931年まで『医学的心理学』の初版を手元に置いて使っていたため³²⁾、このことは知らなかったと思われる(日記等の記述を見る限りでは、おそらく1931年以後も初版以降の版を所有していなかった)。

クレッチュマーは、精神分裂患者が「心の中で」声を聴き、それを実際の音として判断する症例を挙げて、心で感じる「イメージ」(Vorstellung)と生理的な「知覚」(Wahrnehmung)の間の垣根が健常人よりもあいまいな精神病患者の認識が、しばしば直観像を实在のものとして誤認する視覚型の直観像素質者の認識に通底するとした³³⁾。「感覚的体験の原初的かつ未分化な単一性」をもつ子供と未開人に関するイェンシュの研究は、クレッチュマーにとっては、これまで民族心理学と精神病理学の主要な研究対象であった自我と外界との関係、白昼夢、「原始人のイメージ投射」(Bildprojektion der Primitiven)——主観的イメージを外界に投影して、それを知覚的外在として誤認すること——に新たな光を当てるものだった³⁴⁾。実験心理学と精神病理学をつなぐこの視点は、ムージルが書評した「直観像論文」にはなかったものだが、1920年代のイェンシュの仕事調べると、彼が学童を被験者とする心理実験を行うだけでなく、直観像的素質を生理学的観点から分析し、精神と身体的素質の相関関係を心理学的類型にまとめることを目指していたことがわかる。すでに1921年の時点でそうした研究が発表され、直観像的素質の精神病的特性が血液型と内分泌型に結びつけられている。これは、抹消神経の電気的刺激興奮の亢進が特徴のT型(テタノイド型)と、眼球、脈拍、甲状腺症状の兆候を特徴とするB型(バセドウォイド型)という、二つの生理学的類型に基づく直観像の質の違いを論じるという研究であった。1920年代に流行した性格学および類型学に関与していたクレッチュマーがこれを見落とすはずもなく、『医学的心理学』第三版に引用している³⁵⁾。

さらに興味深いことに、クレッチュマーは同じくこの第三版の参考図書の一覧の中で、精神病理学研究に役立つ民族心理学の文献として、K・Th・プロイスとW・ヴントの著作とともにレヴィ＝ブリュールの『未開民族の思考』を挙げている³⁶⁾。イェンシュとクレッチュマー。この二人の研究の親和性の高さを考えるならば、これは驚くにあたらないだろう。未開人の心性に対する両者の酷似した進化論的見解と相まって、前節でも触れた、当時の知的社会における諸学問の連関がここで立ちあらわれている。ムージルがこの二人の文献上のつながりを知らなかったとしても、いや知らなかったからこそ、民族学を立ち合い人として実験心理学と精神病理学が手を握り合っていた当時の知的コンテクストの中にムージルが位置していたという時代制約性が際立ってくるのである。

第二節でみたように、ムージル自身はこの時期、「別の状態」をめぐる模索の途上にいた。ではその内実はどうのようなものだったのか。これを明らかにするために、クレッチュマーが『医学的心理学』で述べた「辺域」(Spähre)という概念に焦点を当てる。

「直観像論文」の第六章は、直観像素質者における知覚と表象の一体化した発達段階を、「直観像的発達層」と呼んでいた。『医学的心理学』では、ムージルが所有していた初版の中で

に、このような心理の「層」理論に対応するものが示されている。クレッチュマーによれば、「発達史的な意味における心の層」(seeliche Schichten im entwicklungsgeschichtlichen Sinn) という考えは、脳生理学による実証が困難で、つまるところ比喩的な表現にすぎない。しかし「感覚・運動性器官全体の作動様式を反映した心的機能系統」、すなわち「心の器官」という心理機制について検討すると、「夢、催眠状態、ヒステリー性朦朧状態、分裂病性思考障害」といった、「精神生活における古い系統発生的発達段階」を示唆する諸機能が見られる。クレッチュマーはこれらの段階が重なって形成する古い「心の層」を総称して「下層知性機制」(Hyponoische Mechanismen) と名付けた³⁷⁾。

その働きをクレッチュマーは多岐にわたって叙述しているが、ムージルが主に参照した「夢」の項とその関連記述に限定して検討しよう。夢は、神経症患者と精神病患者と未開人が慣れ親しんだ世界である。クレッチュマーによれば、夢の中では「抽象的思考の歩み」がなく、「イメージ (Bild) が他のイメージへと列をなして続き」、「対象という性格も、時間・空間的カテゴリーに則した確実な経験的可能性」がないまま、「抽象的なものから具体的なものへ、論理的に組み立てられた文章から非シタックス的に伸び広がり、連なり行くイメージの線」への移行が起こる³⁸⁾。「自我」と「外界」は壊れて互いに溶け合う³⁹⁾。

フロイトの『夢解釈』(1900) が代表するように、一九世紀後半から世紀転換期にかけて起こった、機械論的な心理解釈から力動的な心理解釈への転換のなかで、夢が深層の心理機制に光を当てるものとして重視された⁴⁰⁾。クレッチュマーもまた、健康な人間でも精神病患者や未開人の思考に限りなく接近する夢の思考に着目する。夢が意識のなかでどのように起こっているかを説明するため、クレッチュマーは「辺域」という心理モデルを導入している。

「意識」の概念は、心の中の量的なもの、つまり体験の有する明瞭さの大小である。「完全な意識」とは極めて明瞭かつ明晰な体験であり、「無意識」(というよりはかすかな意識) とは不明瞭で、かすかな、判然としない体験である。[……]「意識の注視点」の中心には物の存在が完全に明るくはっきりと見える小さな領域があり、その周辺にはかなり広い「意識の視野」が伸びているが、この視野は注視点から離れるにつれて徐々に明るさが減り、辺縁部でははっきりとした境界なしに無に移行し、無意識そのものや意識の外側に消失する。この意識野の外縁部をわれわれは「辺域」と名付ける⁴¹⁾。

健康者が夢を見るとき、意識の明るい中心から外れた周辺部の暗い「辺域」で、精神病患者や未開人が見ているような支離滅裂なイメージ世界が生じているのだとクレッチュマーは述べる。彼がこの奇妙な、視覚的、空間的な比喩を伴う概念をあえて使ったのは、フロイトの「無意識」に関する学説から距離を置くためであったが⁴²⁾、他方、夢に関するフロイトの用語(「圧縮」「転移」「象徴化」)は基礎概念として受け入れており、両者の「無意識」理解の間の具体的差異は判然としない。「辺域」の概念に関して重要なのは、クレッチュマーがこの心の領域を芸術家の創

造性と結び付けている点である。芸術家や詩人といった創造的人間の活動は、しばしば夢の体験によって刺激を受ける場合が多いことを彼は指摘し、その理由を次のように述べる。

このような活動が好んで発揮されるのは、精神の薄暗がりや意識の低下の際、外的注意の遮蔽や、催眠状態時のような狭い一点への極度の集中を伴う「放心」の状態、空間も時間も忘れ、論理や意志も消え失せた完全に受動的な体験の中であり、そうした体験には往々にして感覚的・映像の性格が伴う。このような夢幻的な、芸術的生産段階においてはただちに、リズムや様式化への、あの古い系統発生的傾向も荒々しい力で目覚めてくる⁴³⁾。

クレッチュマーはこの引用の直後で、芸術家の創作（詩文学など）が、しばしば論理的には支離滅裂にもかかわらず、韻律や一定の拍子を通じて、豊かな情緒を伴ったイメージや象徴の群となって人の心に染み入り、深い感銘を与えることができるのはなぜかという問題を提起している。芸術の言葉は、論理的意味よりも、その背後にある漠然としたイメージの離散集合や音の作用によって、それを聴く人間の意識の「辺域」に強く作用するためであるとクレッチュマーは述べ⁴⁴⁾、別の箇所では、夢の体験にも似た、このような芸術体験が、宗教的体験や精神分裂病患者の「表現主義的」認識世界と平行関係にあるものだと解釈した⁴⁵⁾。

『医学的心理学』を読んだムージルは、定かならぬ意識の中で思考と感情が論理を超えた結合をする様を論じたこの「辺域」の箇所から得るものがあつたらしい。「美学エッセイ」からの次の引用を読んだうえで、『医学的心理学』からの直前の引用と見比べていただきたい。

しかし、普通無害だと思われていても、世界に対する通常の姿勢に対するこのような対立を示しているものがある。芸術が使用するさまざまな手段である。人類の前文明的段階に由来する「圧縮」と「転移」についてはここで問わないことにして、リズムとモノトーンを例にとろう。この二つは意識を狭めるのに大きな役割を果たしている。意識が狭まると、軽い催眠状態に似てくるが、それは、心中の周辺的な部分を抑え込むことによって、目の前に示された暗示をより価値あるもののように感じさせるという芸術上の同じ目的を持っているからである。芸術が使用するこうしたあらゆる手段は、結局のところ、極めて古い文化状態の中にルーツを持っている。

この文章が「辺域」の記述を言い換えたものだということは一読して明らかだろう。ムージルは、クレッチュマーの研究を広い意味での「感情心理学」(Psychologie der Gefühle) [GW II. 1141.]として捉え、精神疾患、未開性、夢の三つの要素を芸術体験の根底に認めたのである。そして彼にとっての芸術作品の体験の意義とは次の一文に凝縮されている。

総じて芸術手段が意味しているのは、世界と人間との、概念では捉えられないコレスポンド

ンツであり、通常とは異なる連動 (Mitbewegung) である。こうしたことは、ある芸術作品に我を忘れて没入しているときに、突然通常の意識状態が割り込んできて我にかえるという瞬間に気づくことができる。[GW II. 1141.]

この「概念では捉えられないコレスポンデツ」および「通常とは異なる連動」は、第二節で触れたように、1918年時点では「理性的領域」に対立する「非-理性的領域」の領分であり、1925年時点では「通常の状態」に対立する「別の状態」の領分である。すなわちムージルは、人類の歴史において繰り返し曖昧に語られてきた「別の状態」の神秘のベールを、クレッチュマーの「辺域」の概念を経由することで取り去り、芸術作品の「体験」に即して「心理学的」にこれを説明しているのである。

上記の引用に続けて、ムージルは、「融即」に見られるような「未開民族に見られる事物に対する例の特殊な態度」が、現代の芸術体験とどこかで共通性のあること、そして今の芸術体験が「あの先史時代の行為の発展形態」であることを述べ、この共通のつながりを美学の問題として捉えると同時に、「精神病理学」の扱う問題としても見ていた。[GW II. 1141.] また他の箇所では、芸術体験によっても開示されうる「別の状態」の特殊な心理状態が、「あらゆる歴史上の諸民族や神秘説や倫理と同じように一致して繰り返し現れ」るにもかかわらず、「奇妙にも未発展の状態」(傍点筆者)にとどまっておき、なおかつこの状態が近代人の通常の生活の細部にその「痕跡」を残しているとも述べている。[GW II. 1144.] レヴィ=ブリュールの「融即」や「前論理」は、あくまで社会科学的な「集団表象」説によって説明されるものであることは第三節で確認した通りだが、この文脈においてムージルは「融即」を、イエンシュに倣って生理学的(進化論的)、心理学的な意味で理解していることに注意を向けたい⁴⁶⁾。

要約すれば、「別の状態」の「心理学的説明」において、①イエンシュこそが、クレッチュマーとレヴィ=ブリュールをつなぐミッシングリンクであること、②クレッチュマーの「辺域」の概念の中に、実験心理学、精神病理学、民族学の当時の言説が混然一体となって流入していること、③この流れがムージルの「美学エッセイ」にも(ムージルがこれに自覚的か否かは別として)浸透していることを、ここまでで例証できたと考える。

ここで一步進んで、意識の「辺域」で生起する夢の思考が、『特性のない男』でどのように描かれているかを見てみよう。第一巻の第123章「反転」でのウルリヒとクラリッセの対話は、生の中に突然起こる意識状態の変容を二通りに描き出している。ウルリヒの目にもあきらかなほど狂気にたかぶっているクラリッセは、荒唐無稽な話をするなかで、自分たちが暮らしている「状態」には裂け目が走っていて、その裂け目から「あるはずのない」(unmöglich)状態がこちらをのぞき込んでいると感じていると言い、その「穴」を通して向こう側へ「抜け出」したとき、どのような心境に至ったのかを以下のように語っている。

そのとき人は周囲のあらゆるものとひとつなぎになるの、空気をつたって、体が癒着したま

ま生まれた双子みたいに。信じられないような素晴らしい状態よ。すべてが音楽的なものや色彩的なもの、律動的なものに溶けいって、そこではわたしはクラリッセという洗礼名の市民じゃなくて、巨大な幸福の中に食い込むキラキラした切片のひとつなのかもしれないわ。

[GW I. 659f.]

クラリッセの思考は、クレッチュマーの説明を援用するなら、異質な物どうしが奔放に結びついては離れて変容するイメージ連想の世界で生起している。小説の別の箇所では、イメージの連想が「彼女の意識の底の思考層」(tief unten denkende Schicht ihres Bewusstsein) [GW I. 147.] で生じているとも書かれており、ここにイェンシュとクレッチュマーの著作において確認した、心の「層」の理論の影響を見ることができるかもしれない。

ウルリヒはクラリッセの言葉の中に精神の病を見る。だが同時に、その「状態」についての彼女の考えが、精神の不可思議な変容について彼自身が考えてきたことと奇妙に符合することも認める。クラリッセが自宅に帰った後、疲労のために横になったウルリヒは、眠りに落ちる前の夢うつつの意識のなかで、さまざまイメージが沸き起こっては消えていく様を見て、不思議な感情の変化が自分に起こっていることに気付く。

どの部屋も、クラリッセが一人でいたときに付けて回ったランプがまだ灯っていて、そこから溢れた光が部屋の壁や物のそこかしこに流れ込み、その間の空間をなにより生き生きとしたもので満たしていた。[……] 壁や物がなにか実際に変化したわけでもなく、神様がこの不信心な人間の部屋に入りこんだわけでもなく、またウルリヒ自身けっして自分の判断の明晰さを手放しもしなかったので [……]、このような変化を被ったのは、彼と彼の周囲のものとの関係にほかならなかった。この関係のなかで変化したのは、客観的部分でも、またそれに正確に対応する感性や悟性でもない。伏流水のように深いところでじんわりと広がる感情が変化したようだった。その感情の上に客観的知覚の柱と思考の柱がいつもはまっすぐ立っているというのに、今はやんわりと揺れて近づいたり離れたりにしていた。[GW I. 663f.]

狂気と夢。クレッチュマーが「辺域」の概念を使って両者をアナロジーで結んだように、ムージルのこの章で、クラリッセの狂気の思考とウルリヒの半覚醒状態の思考を対で描くことによって、言語化を拒む難解な「別の状態」の意識に迫ろうとしたのである⁴⁷⁾。

ただし、ムージルが「別の状態」の心理学的解明を「辺域」の概念によって説明したのは1925年の時点の話であり、『特性のない男』の「別の状態」概念には、さまざまな別の経路があることは言い添えておかなければならない。第123章に話を戻せば、朝になってから、ウルリヒは冷静に前述の夢の体験を振り返り、これを「少佐夫人」との若き日の恋愛と結びつけている。少佐夫人との恋愛を描いた第32章で、ウルリヒは、自己と世界が取り結ぶ精神的関係が一変することを体感している。夢の中で二つの存在が交じり合わずに通り抜けられるように、遠く離れ

た想い人を、物理的な距離を超えて、すぐ間近にありありと感じたというものである。この精神状態は、ここではしかし「明るく」(klar)、それもすみずみまで「明るい思考」に照らし出されたものであって、夢とはほとんど共通点がないとされていることに注意されたい。[GW I. 125.] 第123章は第一巻の最後の章であり、そこで想起された少佐夫人との恋愛体験のモチーフが、続く第二巻で、妹アガータへの精神的恋愛に接続する。このラインを進めば、晩年のムージルが形象化しようと躍起になっていた「白昼の神秘主義」におのずから行き着くことだろう。それについては他稿に譲るとして、ここで図式的にまとめるならば、ウルリヒとクラリッセのペアが、心理学に基づく「別の状態」の「暗い」面(狂気、未開)を代表し、ウルリヒとアガータのペアが「別の状態」の「明るい」面(神秘主義)を代表しているとも解釈できる。そしてこの対立は、1925年の「美学エッセイ」において、「別の状態」の解明が、一方では心理学的・民族学的・精神病理学的アプローチからなされ、他方では神秘主義的アプローチによってなされていることに端を発しているのではないだろうか。

ローベルト・ムージルのテキストは以下のものを用いた。

Musil, Robert: *Gesammelte Werke in zwei Bänden*. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978. 引用の際はGWの略号を付し、巻号をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表記した。なお、引用にあたっては既存の翻訳文献(圓子修平、岡田素之、早坂七緒、北島玲子、堀田真紀子訳、『ムージル・エッセンス——魂と厳密性』、中央大学出版部、2003年)を参照、借用したが、一部訳文を変更している場合がある。

Musil Robert: *Tagebücher in zwei Bänden*. Hrsg. von Adolf Frisé. Rheinbek bei Hamburg 1976. 引用の際はTの略号を付し、巻号をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表記した。

Musil, Robert: *Briefe 1901-42*. Hrsg. von Adolf Frisé. Rheinbek bei Hamburg 1981. 引用の際はBの略号を付し、頁数をアラビア数字で表記した。

註

- 1) Vgl. Corino, Karl: *Robert Musil. Eine Biographie*. Reinbek bei Hamburg 2003, S. 618–623.
- 2) Roth, Marie-Louise: *Robert Musil. Ethik und Ästhetik*. München 1972, S. 200.
- 3) このテーマに関して以下の文献を参照した。Heydebrand, Renate von: *Die Reflexion Urlichs in Robert Musils Roman „Der Mann ohne Eigenschaften“*. Ihr Zusammenhang mit dem zeitgenössischen Denken. Münster 1966, S. 103–111. Weingart, Brigitte: *Verbindungen, Vorverbindungen. Zur Poetik der „Partizipation“ (Lévy-Bruhl) bei Musil*. In: *Medien, Technik, Wissenschaft. Wissenübertragung bei Robert Musil und in seiner Zeit*. Hrsg. von Ulrich Johannes Beil/Michael Gamper/Karl Wagner. Zürich 2011, S. 19–46. Hahn, Marcus: *Zusammenfließende Eichhörnchen. Über Lucien Lévy-Bruhl und Ethnologie-Rezeption Robert Musils*. In: *Ebd.*, S. 47–72. Wolf, Christian Norbert: *Das „wilde Denken“ und die Kunst. Hofmannsthal, Musil, Bachelard*. In: *Poetik des Wilden. Festschrift für Wolfgang Riedel*. Hrsg. von Jörg Robert/Friederike Felicitas Günther. Würzburg 2012, S. 363–392.

- 4) Jaensch, Erich Rudolf: Über subjective Anschauungsbilder. In: Bericht über den VII. Kongreß für experimentelle Psychologie in Marburg. Hrsg. von Karl Bühler. Jena 1922, S. 3-49.
- 5) マンドラー、ジャン、マッター・マンドラー、ジョージ「実験心理学におけるディアスポラ —— ゲシュタルト心理学を中心に」『亡命の現代史4 —— 知識人の大移動2。社会学者・心理学者』所収、近藤邦夫訳、みすず書房、1973年、81-82頁。
- 6) Corino, a.a.O., S. 225.
- 7) 村田純一『知覚と生活世界 —— 知の現象学理論』、東京大学出版会、1995年、53-65頁を参照。
- 8) 『テルレス』執筆期の実験心理学の受容 —— とりわけムージルが在籍していたベルリン大学の心理学講師にしてシュトゥンプの助手だったF・シューマンを通じた —— に関しては次の文献を参照。Hoffmann, Christoph: „Der Dichter am Apparat“. Medientechnik, Experimentalpsychologie und Texte Robert Musils 1899-1942. München 1997, S. 61-88.
- 9) ムージルは1920年代前半に、神秘主義文献および宗教心理学の研究書に集中的に取り組んでおり、『特性のない男』の構想にも影響を与えた。その点で特にK・ギルゾーンの『宗教的体験の心的構造』(1921)とM・ブーバーの『忘我の告白』(1909)は無視できない。この問題については以下の文献を参照。大川勇「神秘主義の心理学 —— ムージルの「境界体験」とギルゲンゾーン(-)』『ドイツ文学研究』報告第四十号所収、京都大学総合人間学部ドイツ語部会、1995年、157-188頁。Goltschnigg, Dietmar: Mystische Traditionen im Roman Robert Musils. Martin Bubers „Ekstatische Konfessionen“ im „Mann ohne Eigenschaften“. Heidelberg 1974.
- 10) Jaensch, a.a.O., S. 3-9. 松岡和生「直観像：素質者の特性と直観像形成の基礎過程」。『イメージの世界 —— イメージ研究の最前線』所収。ナカニシヤ出版、2001年、23-26頁を参照。
- 11) Jaensch, Erich, Rudolf: Über den Aufbau der Wahrnehmungswelt und ihre Struktur im Jugendalter. V I. Übergang zu einer Schichtenanalyse des Bewußtseins und einiger seiner Substrate, gegründet auf die Strukturanalyse der eidetischen Entwicklungsschicht. In: Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane. Bd. 91. Hrsg. von Karl Bühler, Jena 1923, S. 83-87.
- 12) 脳波測定などの現代の技術に照らせば科学的とは呼び難いこの理論は、近年の直観像研究では過去のものになっている。直観像素質の研究状況をまとめた松岡は、R・N・ハーバーによる直観像研究を次のように要約している。「①直観像はそれほど普遍的にみられる現象ではなく、10%に満たない少数の児童にだけ所有されている能力であること、②直観像は記憶ではなく知覚現象である、すなわち思い出される現象ではなく、文字通り眼前に見られる現象であるということ、③直観像それ自体は特別に正確な記憶でもないし、まして原刺激を忠実にコピーしたような写真的な記憶でもなく、むしろ構成的な性質を持っていること、④直観像所有児は、脳の障害や病的兆候をふくめ、いかなる認知的、人格的側面においても他の児童と異なるような特徴は認められなかったこと」。松岡、前掲書、25頁。
- 13) Jaensch, a.a.O., S. 83ff.
- 14) Lévy-Bruhl, Lucien: Das Denken der Naturvölker[1910]. Wien/Leipzig, 1921.
- 15) Jaensch, Erich, Rudolf: Über den Aufbau der Wahrnehmungswelt und ihre Struktur im Jugendalter. V II. Die Völkerkunde und der eidetische Tatsachenkreis. Nebst einer Erörterung über Lévy-Bruhls Psychologie der Naturvölker. In: Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane. Bd. 91. Hrsg. von Karl Bühler, Jena 1923, S. 88-111.
- 16) Ebd., S. 88.
- 17) この点の精神的背景については以下の著作を参照した。上山安敏『フロイトとユング —— 精神分析運動とヨーロッパ知識社会』、岩波書店、1989年、408-459頁。
- 18) Freud, Sigmund: Totem und Tabu. In: Sigmund Freud Studienausgabe. Bd. 9. Frankfurt am Main 1975,

S. 378.

- 19) Lévy-Bruhl, a.a.O., S. 13f.
- 20) Ebd., S. 11.
- 21) Ebd., S. 15f.
- 22) Ebd., S. 58. この「異なる」思考が西欧的認識世界からの脱却の道筋を示したことにより、『未開民族の思考』がドイツ知識層、とりわけH・v・ホフマンスタールやG・ベンなどの文学者によって受容されたかについては、以下の研究を参照。Riedel, Wolfgang: Archäologie des Geistes. Theorien des wilden Denkens um 1900. In: Das schwierige neunzehnte Jahrhundert. Germanistischer Tagung zum 65. Geburtstag von Eda Sagarra. Hrsg. von Jürgen Barkoff/Gilbert Carr/Roger Paulin. Tübingen 2000, S. 467-487.
- 23) Lévy-Bruhl, a.a.O., S. 57ff.
- 24) Ebd., S. 2f.
- 25) この点については以下の文献を参照した。『西洋思想大事典』第二巻、平凡社、1990年、638頁。エレンベルガー、アンリ『無意識の発見 — 力動的精神医学発達史』上巻、木村敏・中井久夫監訳、弘文堂、1980年、337、462-465頁。
- 26) Jaensch, a.a.O., S. 92f.
- 27) 十九世紀後半から世紀転換期にかけて、ヴントの強い影響の元、進化論とも親和性のある彼の民族心理学とともに心理測定の厳密な学として発展した実験心理学の動向については、以下の文献を参照。高橋濤子『心の科学史 — 西洋心理学の背景と実験心理学の誕生』、講談社、2016年、118-198頁。
- 28) Jaensch, a.a.O., 96f, 106ff.
- 29) ムーゼルの作品および日記等の記述に基づき、彼の内面における視覚的イメージの性質を取り上げ、これを直観像のほうに引き寄せて解釈する論者もいる。Vgl. Corino, Karl: Robert Musil. Leben und Werk in Bildern und Text. Reinbek bei Hamburg 1988, S. 486. und Roth, a.a.O., S. 419.
- 30) 一例を挙げれば、1920年代におけるムーゼルの民族学を受容をポストコロニアリズム的視点から論じたハーンの研究が興味深い。彼は、一九世紀のドイツの近代民俗学の成立以来、民族学が常に原始医療をめぐる植民地主義的言説と絡み合っていたことを論じ、ムーゼルのレヴィ＝ブリュール受容に直接的、間接的に影響したことを明らかにしている。Hahn, a.a.O., S. 55-58.
- 31) Kretschmer, Ernst: Medizinische Psychologie. 3. überarbeitete Auflage. Leipzig 1926, S. 26-30. さらなる文献上の憶測が許されるならば、1923年に「心理学雑誌」に投稿された、イェンシュの「青少年期における知覚界とその構造について」(第七章)の次のページから始まる書評で、クレッチマーの『医学的心理学』の初版が紹介されていることを考えると、ムーゼルが『医学的心理学』を知ったのは、イェンシュ受容がきっかけだったという可能性も考えられる。書評の出典は以下の通り。Hoche, A: Literaturbericht. In: Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane. Bd. 91. Hrsg. von Karl Bühler, Jena 1923, S. 112-114. なお、本文中で『医学的心理学』から引用する際には以下の邦訳を参考にした。クレッチマー『医学的心理学』第一巻、西丸四方・高橋義夫訳、みすず書房、1955年。
- 32) 1931年に発表された彼のエッセイの中で、『医学心理学』の初版からの引用がある。[GW II. 1214.]
- 33) Kretschmer, a.a.O., S. 26f.
- 34) Ebd., S. 27f.
- 35) Ebd., S. 29f.
- 36) Ebd., S. 267.
- 37) Kretschmer, Ernst: Medizinische Psychologie. Ein Leitfaden für Studium und Praxis. Leipzig 1922, S.

52f.

- 38) Ebd., S. 55f.
- 39) Ebd., S. 63.
- 40) エレンベルガー、前掲書、351-359 頁。
- 41) Ebd., S. 65f.
- 42) Ebd., S. 66.
- 43) Ebd., S. 67.
- 44) Ebd., S. 67f.
- 45) Ebd., S. 76-84.
- 46) 日記の記述をたどる限りでは、ムージルがレヴィ＝ブリュールの議論をイェンシュ論文とは無関係に知ったのかどうか、それとも「直観像論文」を媒介して知るに至ったのかどうかは確定できない。ムージルの日記でレヴィ＝ブリュールの名が初めて記されているのは、1923 年 5 月頃と推定されるクラークスの著作に関するメモの直後である。[TB I. 627.] 対して問題の書評が「プラーガー・プレッセ」に掲載されたのは同年の 6 月 23 日（「直観像論文」の掲載された雑誌の出版は 1923 年の前半期）なので、ムージルはほぼ同時期に両者の研究に関心を持っていたことになる。M・ハーンは、ムージルが 1921 年にドイツ語訳の『未開民族の思考』が出版された直後からこの著作の存在を知っていたであろうという F・ヴァタンの推測に基づき、ムージルのレヴィ＝ブリュール受容はイェンシュ受容との関連がないと主張しているが、後者の研究は筆者未見。Hahn, a.a.O., S. 49f. und Florence Vatan: Robert Musil et la question anthropologique. Paris 2000, S. 73-87.
- 47) 「辺域」についてムージルは、「美学エッセイ」以降、1931 年のエッセイ「文士と文学」でもこれに言及しているほか、1930 年代の日記 Heft34 では、自身の夢を解釈するさい、フロイトの夢理論ではなくクレッチュマーの「辺域」を用いている。[TB. 838.]